

第五回 中國域外漢籍國際會議

町田三郎

一九八六年九月、神田の明治大學講堂で第一回の『中國域外漢籍國際會議』が舉行されてから、早くも第五回の『會議』を迎えることとなった。ふり返ってみると、第二回は臺北の新聞社「聯合報」、第三回はソウル郊外の保養地水安堡、昨年の第四回はハワイのプリンス・クヒオホテルであった。そしてそのときどきに印象に残る発表やら討論があった。

今回はソウルの「總統大飯店」で十二月一日から十二月四日にかけて開催された。實は昨年のハワイでの話では、次回はロスアンゼルスで催される豫定とのことであった。しかしどうしたわけか夏から秋になっても心待ちしていた開催通知の連絡がない。些さかがっかりしながらきつと今年は何かの

事情で中止なのだろうと思っていた矢先、十月に入ってから突如ソウルで開催するから十月末日までにレジュメを送れ、という。またぜひ日本から数名は参加して欲しいから推薦を頼むという。こちらのひとり決めとはいふものの今年は中止と思いきや、こころがすっかり萎えているところへさあ急げといわれてもただ困惑するばかりである。まして時間もなく、秋ぐちは學會シーズンであってみれば、誰れにも豫定があり押しつけも遠慮される。そうかといつて従來からのいきさつもあり、切角準備された學會でもあり、何とかせねばとの思いもある。こんな事情が絡んで結局九州の先生方を中心に参加をお願いすることとなった。

日本からの出席は七名。東京からは駒澤大學の中村璋八教

授、九州からは福岡教育大學の菰口治教授、福岡大學の笠征教授、西南學院大學の王孝廉教授、九州大學大學院の連清吉君、琉球大學の赤嶺守助教授、それに私であった。

十二月一日、福岡は雨。私どもを乗せたアジアナ航空の七三七がぶ厚い雲をかきわけて金浦空港への着陸態勢に入り、ふと機外を見て驚いた。地上は一面まっ白。雪景色である。農家の屋根も晶も白一色。十二月の暖冬福岡からわずか一時間、ソウルはいまやま冬だったのである。

第五回の『中國域外漢籍國際會議』は、臺灣の「聯合報國學文獻館」と「韓國中國學會」との共同主催で、會期は十二月一日から四日まで、會場は明洞のロッテホテルに隣接する「總統大飯店」(Hotel President)。一日はホテル到着後、参加者の登録、夜は名物の「蔘鷄湯」。往き歸りの道路は車の洪水、いたる處で澁滞する。

翌二日の九時半、ホテル内の會議室で開幕式典が行われ、この『會議』の運営萬般に責任をもつ臺灣大學陳捷先教授の開會の辭があり、ついで來賓として中華民國駐韓大使金樹基氏と圓光大學校長金三龍氏の祝辭があつて、セレモニーは終る。會場は第一と第二の二つ。發表者とその題目とを以下に掲げておく。發表時間は質疑を含めて三十分。

十二月二日(日)

第一會場(十八階會議室)(一〇・三〇～一二・〇〇)

司會 全海宗

發表者

杜維運 「韓國史家用中文寫的一部史書——標題音註『東

國史略』」

張存武 「韓人保留下來的明代前期公牘——吏文殘卷」

陳捷先 「略論中國域外漢籍的史料價值——以清初阿克敦

訪韓事爲例」

第二會場(十九階會議室)

司會 昌彼得

發表者

中村璋八 「吉田神道與道教經典」

笠 征 「『冥報記』對漢譯佛典之影響」

梁銀容 「『大衆感應篇』之流行與韓國佛教」

晝食

第一會場(一四・〇〇～一五・三〇)

司會 金學主

發表者

鄭樸生 「佚存日本的『經國雄略』」

菰口治 「關於朱舜水書簡的新資料」

赤嶺守 「『琉球復舊運動』之請願書中的國家意識」

第二會場

司會 中村璋八

發表者

町田三郎 「重野成齋其人及其學問」

王孝廉 「關於富永仲基的加上說」

陳慶浩 「『明心寶鑑』之源流及傳播」

休憩（一五・三〇～一六・〇〇）

第一會場（一六・〇〇～一八・〇〇）

司會 宋晞

發表者

昌彼得 「跋日本活字本事實類苑」

丁奎福 「『洪吉童傳』漢文本與原典問題」

沈隅俊 「探討流傳日本之韓國版漢籍史部書」

成元慶 「關於『洪武正韻』譯訓本」

第二會場

司會 町田三郎

發表者

黃錦鉉 「何晏論語集解的特點」

第五回中國域外漢籍國際會議（町田）

黃啓方 「奎章閣所藏六臣注本與胡克家重刻李善注本文選

校讀記——以『離騷經』王逸注爲例」

蔡茂松 「李寒洲的『春秋集傳』」

連清吉 「龜井昭陽及其『莊子瑣說』」

晚餐（一八・〇〇～二〇・〇〇）

十二月三日（月）

第一會場（九・三〇～一一・三〇）

司會 黃元九

發表者

宋晞 「論流傳於歐州的中國地方志」

方映荷 「卑斯大學蒲坂善本藏書」

朴現圭 「中華民國故宮博物院藏韓國古書之分析」

鄭恒雄 「域外漢籍索引述評」

第二會場

司會 黃錦鉉

發表者

晞兆祐 「中國古籍刊本中的域外地圖」

金學主 「朝鮮時代刊行朱文公校『韓昌黎文集』簡論」

洪瑀欽 「『桂苑筆耕』書中崔孤雲的駢文在文學史上所占的

地位」

金在先 「明弘治年間中國江南北之民情及其社會習俗——

以崔溥『漂海錄』爲中心」

三日の正午を少しまわったところで以上の研究発表はすべて終る。参加者全員が第一會議室に集合して閉幕の式典。はじめに臺灣文化大學の宋晞氏が立ってユーモア溢れる謝辭を述べ、ついで日本がわを代表して中村璋八氏が周到な配慮をいただいた御禮を述べ、最後に韓國中國學會會長の辛勝夏氏のこの『會議』を總括するあいさつがあつて萬事終了。

晝食後はバスでソウル近郊の社寺參觀。私は都合で缺席。

夜は中華民國の大使館での晚餐會。大使館は殷賑な明洞の街の一角にあつた。廣大な庭園が印象的であつた。

四日は歸國。この日も寒い朝であつた。

ソウルでの『會議』の間、私は司會・發表ともに第二會場を振り當てられていたので、終始ここに席を占めていた。實はこの會場は第一會場に比べてきわめて狭く、椅子は十四五で滿杯。圓卓形式の小會議場であつた。はじめは狭すぎるの思ひがあり、些さか會議の進行上にも心配があつたのだが、實際に始めてみるとまことに具合がいい。要するに發表者も質問者も、大教室での演說調ではなく、演習室できめ

細かくまめやかにやりとりするあの雰囲気なのである。従つてかなり突っこんだ議論もまるで隣りの人と話し合うような調子でやりとりができる。椅子がなく立ったまま討論に参加する人もい、會議はいたつてスムーズに進行した。思ひがけぬ經驗であつた。

この『會議』も回を重ねてようやくその性格というか特徴というかが見えてきたようである。第一は『會議』の本来の目的である「漢籍」に關する諸種の情報の提供・交換である。中國の「域外」と限ってみれば、やはりわが國に貴重な資料が多いことは論ずるまでもない。しかし意外な資料が韓國やヴェトナムに所藏されている。この種の情報はまことに重要である。閉幕のあいさつで宋晞氏は、いつの日かヴェトナムでこの『會議』を開きたいという。同感であつた。

第二は交流する學者間の親密さである。参加者の顔ぶれは年ごとに變るとはいえ、そこにはいくつもの昨年、一昨年と見慣れた顔がある。互いに特別に語り合うことはないにしても、懐しいものである。何かことが生じたとき、気軽に相談を持ちかけられる雰囲気である。同志的な親密さともいふものであろうか。これも回を重ねてきたこの『會議』の餘慶とでもいふべきものであろう。私はこういうムードも高く評

價したい。

次回は中華民國の建國八十周年を記念して、臺北で開催したいとは、この『會議』の實質的な責任者、臺灣大學の陳捷先教授の希望であった。

(一九九一・一・四)